一　夏の宿題

「一体、わしらの子孫たちは何をやっているんじゃ」

「ほんとに、ほんとじゃ

「わしらが血や汗を流して開墾した田や畑を何の断りもなく、集合住宅や駐車場にして」

「それ、アパートと言うんやろ」

「マンションじゃないのか」

「いや、それこそ、何しょん？だ」

「貸すぐらいならいいけど、土地を手放す奴もいる」

「自分で努力して開墾もしなかったくせに、たまたまこの家に生まれたというだけで相続とやらで自分のものになった気になっている。おかしいぞ」

「そうじゃ。そうじゃ。子孫たちに使用することは認めてやってもいいけれど、処分することまでは認めていないぞ」

「いっぺん、お仕置きが必要じゃな」

「それもきついお仕置きじゃ」

「でも、どうやって？」

「今、考えているところじゃ」

「時間はないで」

「ああ、わかっとる。実行する日はあの日じゃ」

「あの日とは？」

「まあ、期待しとってくれ」

「ここか」

　住宅街の中、目立たないことを自慢するかのようにコミュニティセンター、通称コミセンが建っていた。築四十年は経っているだろうか。建設当時は、永遠に白亜の宮殿が維持できると名の元に建設された外壁は、長年の風雨か、または、利用する人々の心の性か、灰色に薄汚れちまって、元の面影はない。それでも、建物の根幹をなすコンクリートの壁は、堅固を誇り、立ち寄る人を拒むような威風をまだ備えていた。

　中垣は再度、スマホで場所を確認する。彼はこの地域に住み始めて四年目。高校三年生の時に、父親がこの地域に家を新築したので住み始めたのだった。それまでは同じ市内には住んでいたものの、この地域を訪れることはなかった。

　いや、思い出した。小学生の低学年の頃、子供会の行事で、さつまいも堀に来たことがあった。その時には、この辺りは田んぼや畑が広がり、家はポツンポツンと点在しているだけであった。それなのに今は、満員電車で隙間があれば体を押し込んで自分の居場所を確保する人々のように、狭い道なりに乱雑、自分勝手と言っていいほど家が立ち並んでいた。駅を降り立つと東西南北が一望でき、見通しのよかった地域は、今は、迷路のような町に変貌していた。だから、この地域に住む始めたものの、地域のことはよく知らない。

　中垣は、朝、家を出ると、街の中心部に向かって自転車を走らせ、高校に行き、帰りは、中心部の商店街で時間をつぶし、ほぼ同じ道を自転車でかっ飛ばし自宅まで帰る。この毎日の繰り返しだった。また、地元の大学に入学したので、基本的行動は高校時代と変わらなかった。だから、このコミセンに来るのも初めてだ。コミセンがあることさえ、コミセンと言う名前さえ知らなかった。

「間違いない」と自分に言い聞かせるようにして、見るからに重そうな全面ガラスのドアを開く。ギー。重い。これは、人を招くドアじゃなくて、人を拒絶するドアだ。ドアを開けて入ってすぐ左側に受付があり、ガラス窓越しに見える事務所の中には数人の職員が椅子に座ってパソコンに向かってキーボードを叩いているのが見えた。中垣は職員に向かって声を掛けた。

「こんにちは」

　だが、ガラス窓越しでは声が届かないのか、それとも声が反射されたのか、中の職員には気づ

いてもらえない。そこで、中垣はガラス戸を開け、「こんにちわ」と更に声を大にした。その声に反応して、女性職員がやっと受付の方に近づいてきた。中垣は大学生。中垣が知り合いの女性と言えば、同級生や先輩・後輩たちで、二十歳の前後ばかりだ。年の離れた女性と言えば母親だが、年齢は四十七歳。だから、女性の年齢は見た目ではよくわからない。自分よりも年上だとわかるけれど、二十歳代の後半なのか、三十歳代なのか、それとも母親と同じ四十歳代なのか、よくわからない。ただし、中垣の祖母は七十歳代なので、そこまでの年齢ならば、おばあさんだと認識できる。つまり、おねえさんとおばさんの呼び方の区別がつかないのだ。

「あのー。すいません。お祭りのボランティアの募集を見たんですけども」

　中垣はできるだけ笑顔を作り、はきはきとしゃべった。少しでも印象をよくするためだ。

「ああ。ありがとうございます。今、担当を呼びますので、しばらくお待ちください」と女性が再び事務所の奥の方に引っ込んだ。机をこちらに向けた男性職員と話をしている。役職の人か。再び、女性職員が窓口に近づいてきた。

「どうぞ。中にお入りください。担当が直接お話をしますので」と事務所の入口を指し示す。

「はい。わかりました」

　中垣は勝手の分からないまま事務所の中に入り、応接セットの前に案内される。だけど、座っていいものかどうかもわからない。だから、立ち尽くしたままだ。それに気づいたのか、

「どうぞお座りください」

　挨拶をしてくれたのは、髪の毛がかなり減ってきていた男性だった。自分の父親が五十歳から判断すると、相手は六十歳過ぎだろうか。大学の中で同級生たちの学生と過ごしていると、先ほど、女性の年齢の区別がつかないように、社会で働く人たちの年齢がわからなくなる。教授たちともゼミや授業で接触する機会はあるけれど、相手の年齢を意識することない。大人は大人でしかない。その大人の担当者が

「事務局長の木本です。よくおいでくださいました」とにこにこしながら、中垣の向かい側に座った。

「いやあ。本当に助かりますよ。この街は区画整理された新興住宅街で、地元の人と新しく移り住み始めた人で占められていますが、小学校や中学校、病院、スーパー、ドラッグ店、公園があり、生活するのに何不自由がなくて便利だし、電車の駅や市内の中心部からも近いことから、

新しく住む人が今増えているんです。一方、昔からの地元の人は高齢化しているし、その子どもたちは成人したのですが、残念ながら、この地域には住まず、県外や市外に出て住んでいるんです。また、地元の人と新しい人との間に、中くらいの昔から住んでいる人もいて、まさに三層構造になっているんですよ」

「三層構造ですか。まるで、サンドイッチですね」

　中垣の家族は、その中くらいの昔から住んでいる人たちに該当する。電車の駅を中心に、様々な住宅会社の建売住宅が無計画に、いや、我こそは先にと建てられて、中垣の父親もそのうちの一軒を購入したのだった。それは、中垣が高校三年生の時だった。だから、中垣もこの地域にそんなに思い出がなく、だから深い思い入れもないのだった。

「そう。そう。サンドイッチですよ。でも、サンドイッチは、パンとおかずが仲良く引っ付いているでしょう。でも、ここの住民は、パンとおかずがバラバラなんですよ。そのくせ、地元の人、途中から住みだした人、新しく住みだした人たちは、自分たちがこの街を作っているんだ、一番だと思っているから、困るんですよ。まあ、言えば、バラバライッチと言えばいいんですかねえ」

　事務局長の木本さんは冗談交じりに説明してくれた。

「それで、僕は何をすればいいんでしょうか？」

「ああ。そうですね。ここの住人の愚痴ばかりを言っても仕方がないですね。実は、簡単なことです。盆踊りをやってもらいたいんです」

「盆おどりって、盆に踊る踊りですか？」

　言ってしまった後で、赤面する中垣。言葉通りそのままじゃないか。何の質問にもなっていない。まさに、オウム返しだ。それでも、森本さんはそんな中垣を気遣ってか、

「そうです。まさに、盆に踊る踊りです。元々、盆踊りは亡くなった人を偲び、弔うために始まったんです。昔、この地区でも盆踊りをやっていたのですが、いつの間にか、やらなくなったようです。確か、私が子どもの頃はやっていたはずです。実は、私も踊ったことがあります。今回、その盆踊りを、十年ぶりか、二十年ぶりに復活したいんです」と盆踊りの由来と過去のいきさつまでも教えてくれた。

　中垣の両親は健在で、また、中垣の両親の父母、つまり中垣にとっての祖父母も健在である。だ

から、故人を偲ぶと言われてもあまりピンとこない。盆踊りと言えば、どちらかと言えば、県外に出た親族や子供たち、同級生たちが集まるイベントだと思っていた。

「でも、盆踊りって、地元の人が中心になってやるんじゃないですか。僕のような、この地域にあまり縁がないよそ者が参加してもいいんですか？」

　疑問をそのままストレートにぶつける。

「ええ。よそ者だからこそお願いしたいんです。この町は、さっき説明したように、昔から住んでいる人、駅の近くに出来た家を購入して住み始めた人、そして、区画整理されてマンションやアパートなどに移ってきた人の三種類に分かれています。昔からの人は、高齢化が著しくて、踊ることさえ難しいのです。中くらいの人は、まだ、現役で働いているので、休みの日は家でごろ寝です。新しく来た人は若い人が多く、子育てに忙しいのか、休みの日は公園で遊んだり遠出をしたりします。だから、誰も、盆踊りの担い手にならないんです。でも、花火を打ち上げれば、見には来るんですけどね。でも、お手伝いはしてくれないんです。私も盆踊り以外にもすることがたくさんあって、困っているんです」

　木本さんのため息は大きくなり、一瞬、ため息から怒りに変わろうとしたけれど、それをすぐに抑制し、やがてあきらめに収縮していった。

「そうですか」と答えながら、これは失敗したんじゃないかと、中垣は思った。自分がボランティアに来たのは、大学の授業で、地域活動と言う選択科目があり、地域のボランティア活動をして、その取り組んだ内容をレポートとして提出すれば単位がもらえるものだった。それで、自分が住んでいる地域のコミュニティ活動ならば、手軽でいいなと安易に考えたのだった。

　だが、コミュニティ活動と言っても、住民がバラバラではしようがない。もちろん、その責任の一旦は、これまで盆踊りや町民運動会、最近、特に必要性が高まっている、災害時の際の防災訓練など、地域のイベント等に積極的に参加してこなかった人たちのせいだ。自分がいかなくても誰かが行くだろう。行っても。誰も知らない人たちだから面白くない。そんな理由だ。もちろん、そうしたイベント等に参加しなければ、永久に地域の人たちとは知り合いになれないのだが。

　言い訳かもしれないけれど、自分を始め、多くの大学生たちなんて、自分の事が精一杯で、他人の事、地域の事なんかに目を向ける余裕や、やる気がないのだ。でも、多分、教授は、そうした中垣たち大学生の心理を読んで、単位というにんじんをぶらさげて、地域に目を向けさせようとしたのだろう。やはり、単位を取るためには、地道に授業に通って、試験を受けて、試験に合格するしかないのか。単位はそこら辺の道端に転がってはないということだ。

　それに、木本さんの話を聞くと、ボランティア、お手伝いというよりも、主、リーダーに祀り上げられそうな雰囲気だ。自分もそこまでは暇ではないし、年配者相手に仕切れるほどの能力はない。自信が揺らぐことはあってもやり切る自信はない。

「話はよくわかりました。一度帰って・・・」と言い掛けたとき、中垣の手は木本さんの両手でがっちりと握られた。関節が肥大化したごつごつした手だ。その手は、田んぼを耕したり、草むしりをしたりなどして農作業で鍛えられたのだろう。振り払おうとしても払えない。しっかりとホールドされた。

「お願いですよ。ぜひ、協力してください。もちろん、私たちも手伝います。いや、私たちが主になってやります。あなたには決してご迷惑をかけません」

　木本さんの必死な形相。このまま断れば、頭だけ飛び出して田んぼに埋められ、すいか割の実験材料になりそうだ。しかも、後ろを振り向くと、中垣が入ってきたドアの辺りには、先ほどまで椅子に座っていたはずの女性職員二人が、片や、お盆にアイスコーヒーとイチゴのショートケーキを載せて、片や、雨が降っていないのに透明のビニール傘を両手に持って立っていた。しかも、その傘を回転させている。ケーキの飴と鞭の傘だ。

　この事務所から五体満足で、無事には出られそうにはない。万が一脱出できても、手や足の骨を折るなど、かなりの被害を被りそうだ。中垣には、美味しそうにケーキを食べる姿と床に這いつくばって顔にケーキを投げつけられた姿の二つの未来が見えた。どちらを選ぶつもりなのか。木本さんの真剣な眼差しが選択を促している。どちらでもいいんだよ、と。あなたが好きな方でいいんだよ、と。それが、かえって怖い。

「わかりましたよ。やりますよ」

　やや投げやりながら、中垣は協力する意思を示した。

「ありがとうございます」

　ほっとした声と、それこそテーブルに額をつけんばかりに頭を下げる森本さん。どうぞ、どうぞ、と女性職員がアイスコーヒーとケーキをテーブルの上に並べてくれた。また、傘を持っていた女性職員は雨も降っていないのに、蛍光灯がまぶしいでしょう、と透明のビニール傘を部屋の中で差してくれた。周りは完全に包囲された。窮鼠の前にケーキがあるだけだ。

　食べるべきか、食べざるべきか。お腹は空いている。ここのところ、甘いものは食べていない。だが、この甘さに魅かれたら、最後には辛い結果が待っている。砂糖の裏返しは傷口に塗り込

められる塩や唐辛子なのだ。だが、人はその辛さがわかっていても、目の前のにんじんであるケーキに手を、口を出してしまうのだ。

　ええい。南無阿弥陀仏。ふだん、口にしたことがなく、年に一度のお正月の際のお寺参りの際に出る念仏が口から出た。中垣には信仰している宗教はない。時と場所に応じて、南無法蓮華経や南無大師遍照金剛、般若波羅密多心経と唱える。時には、意味もわからないまま、回数は何回だったっけと、頭を一回から四回の範囲で下げ、手は一回から二回打ち、再び、頭を一回または二回下げている。まさに、その場の雰囲気に合している。だから、お参りに行ったときには、意味もわからず、理由を知ろうとせず、ただ隣の人が唱えている文言を真似たり、動作を真似ているのだ。

　今日も、おまじない、厄除けのつもりで、南無阿弥陀仏と口に出して、ケーキをほおばった。あまりにも勢いよくケーキを口の中に入れたので、噛み切れなかったケーキの破片が口から飛び出た。それは、以前、日本史の教科書で見た、僧の像の口から飛び出すお釈迦様のようだった。

「そんなに慌てて食べなくてもいいですよ。喉に詰まったのなら、コーヒーを飲んでください」

　木本さんが右の口角を上げ、やさしく微笑んでいる。だが、その優しい微笑みの裏には、獲物を獲得し、勝利に溢れた喜びが満ちているのを中垣は見逃さなかった。もちろん、この時のやさしさが、後になって、倍返しとなって厳しさとして返ってくるとは、この時には思わなかった。ただし、後から考えるに、大好きなケーキが口から飛び出すということは、体は本能的に、将来、望ましくない目に会うことに気付いていたのかもしれない。